「食物アレルギー」

てんびんカイロプラクティック整体院
院長　野間　実

【患者】

七十七歳　女性　主婦

糖尿病、白内障を患っている。

【病歴】

平成二十二年三月にアボカドを食べて、顔面が一面赤くなり、皮膚が乾燥してぼろぼろとはがれた。その後、魚介類、野菜、肉類などの多くの種類の食べ物を食べると、同じ症状が起きた。

アレルギー科で、アレルゲン検査を受けたが特定できなかった。処方された薬を飲んでも症状でがるので、医師から症状の出る食べ物を食べないようにアドバイスだけ受けた。

アレルギー反応が出ない食べ物が極端に少なく、米と味噌などを食べて生活をしていた。

【検査】

心身条件反射療法（以下、PCRT）による神経反射検査、神経言語反射を使用し、「感情」「五感」「経絡」を評価し検査を行った。

【治療】

〈初回から六回目：二〇一一・四・三～四・二四〉（週に二回のペース）

神経言語反射にて、症状と関連したエネルギーブロック（以下、EB）を検査した。食べ物を食べているイメージから、関係しているストレスをチェックした。

じゃがいも⬇「趣味関係の楽しみ・充実」

ほうれん草⬇「趣味関係の好奇心」

野菜⬇「視覚」⬇「物」⬇「趣味」⬇「帽子作り」

感情面では、趣味に関係することが検出された。話を聞いてみると、大正琴、手芸、百ます計算、絵画鑑賞、花の鑑賞など、いろいろな趣味を楽しまれているということだった。趣味関係で挑戦したいことが沢山あるということだった。

PCRTにてパターンの切り替えを行った。

具体的な食べ物のイメージ以外にも、以下のような質問をして反応がでるか検査も行った。

「食物アレルギーが治ったら何がしたいですか？」⬇「子どもの家族と旅行に行く」

「いつ治ると思いますか？」⬇「孫の運動会のある六月には治ってお弁当を食べる」

これらの質問と答えに対しても、神経反射反応が検出されたので、PCRTにてパターンの切り替えを行った。

そして、術中や術後の話の中で「最近の食べものには何が入っているかわからない。」とよく言われていた。

そこで、「食べものに何が入っているかわからないから症状が出る」というイメージをしてもらったところ、反応が検出された。そこで「自分は、どんなものを食べても大丈夫」という切り替えを行った。

術後、再検査にてEBを評価、検出された陽性反応が陰性になった。

〈七回目～二十五回目：二〇一一・四・二八～七・二八〉（週に二回のペース）

症状が出る食べ物を一つずつ検査して、反応がでたパターンをPCRTにて切り替えを行った。

キャベツ⬇脾経

じゃがいも⬇不信

たまねぎ⬇心経、「喜び」

メザシ⬇胆経、「不安」

ごぼう⬇肺経、「不安」

きゅうり⬇大腸経

みかん⬇膀胱経

ブドウ⬇胃経、「自尊心」

サバ⬇肺経

ピーマン⬇心経

たまねぎ⬇胃経

など。

治療した食べ物を次回の治療までに食べてもらい、症状が出たか報告してもらった。一回の施術で症状が出なくなった食べ物もあったが、複数回（二回～三回）の治療が必要な食べ物もあった。

〈二十六回目～三十一回目：二〇一一・八・一一～九・二四〉（週に一回のペース）

以前のような症状が出る食べ物がほとんどなくなった。症状が半分くらいでたり、少し顔が赤くなる程度になってきた。そういった食べ物についても検査を改めて行った。

塩さんま⬇胃経、肺経、ブレインマップ（頭頂）

まくわうり⬇心経

とうもろこし⬇肺経

空芯菜⬇心包経、大腸経

など。

この時期は、主に経絡のパターンで、五感や感情などはほとんど反応がなくなった。

〈三十二回目～現在二〇一一・一〇・九～二〇一三・一・一二〉（月に二回のペース）

症状の出る食べ物がほとんどなくなったので、主に腰痛などの治療に切り替えた。

【経過】

二〇一三年のお正月に「三年ぶりにお正月を孫たちと楽しく料理を頂くことができました」「残りの人生を楽しく過ごせそうです」と手紙を頂いた。現在のところ、症状の再発は確認されていない。

【考察】

本ケースは、アレルゲンが特定できない食物アレルギーに関して顕著にPCRTが奏功した症例であった。

アレルギー科では治療できず、日常生活では症状のでる食べ物を食べないようにしていた。患者は症状がでない数少ない食べ物だけで二年間過ごしていた。

PCRTの神経反射と神経言語反射による検査で、趣味に対しての意欲的な感情と経絡があることがわかり、切り替えることができた。

西洋医学には、化学療法や外科手術などの得意分野がある。また、従来のカイロプラクティックや整体は体のバランスを整えることが得意である。

PCRTは、西洋医学と従来のカイロプラクティックや整体の隙間にあるような症状にも効果がある。今後、一人でも多くの患者に安心と喜びを感じていただけるように、さらに研究を深めていくことが重要である。